

【台湾】コロナ禍における子どもたちのQOL、レジリエンス、デジタルメディア活用に関する地域的特性

朱子君、台北教育大学准教授
洪福財*、台北教育大学教授
翁麗芳、元台北教育大学教授
利一奇、新北市平溪区十分国民小学校長
謝秋如、新北市 新莊区興化国民小学校長
吳佳雯、新北市新莊分区 広報センター主任

1. はじめに

古代ローマや中世ヨーロッパが存在した遙か昔から現代に至るまで、子どもたちは常に3つの大きな脅威に晒されてきた。すなわち、伝染病、飢餓、戦争である。これらは人間の歴史の中で何度も登場し、完全に消え去ることはなかった。人間がいかに神に祈ろうとも、科学、テクノロジー、社会構造がいかに発展しようとも、これら3つの脅威を消滅させることはできず、多くの国々ではいまだに苦しめられているのが現状である。

CRNアジア子ども学研究ネットワーク(CRNA)は、コロナ禍における子どもたちのクオリティ・オブ・ライフ(QOL)とレジリエンスについてアジア8カ国による共同研究を企画し、これら全ての国で子どものレジリエンスとハピネスに関するアンケート調査を実施した。この共同研究に参加した台湾チームもアンケート調査を行ったことから、その結果を以下に報告する。

1-1 世界中に広がった新型コロナウイルス感染症(COVID-19)

新型コロナウイルス感染症は世界中に蔓延し、100カ国以上が影響を受けた。2020年3月11日、世界保健機関(WHO)は、急速に感染が広がる新型コロナウイルスの現象を、世界的な大流行を意味する「パンデミック」と宣言した。リアルタイム統計表示サイト「Worldometer」によると、2022年1月28日午後2時(台湾時間)の時点で、世界の感染者数は366,918,707人、死亡者数は5,656,960人に及んだ。最も多かったのは米国で、累計感染者数74,695,333人、累計死亡者数902,140人を記録している。新型コロナウイルスのパンデミックは多くの人々の健康と生命を奪い、経済に深刻な打撃を与えた。

* 責任著者

1-2 台湾における新型コロナの状況

台湾もまた新型コロナの脅威から無傷ではいられなかった。台湾の衛生福利部疾病感染署によると、2022年1月28日現在の累積感染者数は18,634人、累積死者数は851人であった。2022年1月24日、中央流行疫情指揮中心（CECC）は、2月7日まで警戒レベル第2級の延長を発表した。感染者数と死者数を見る限り、台湾では新型コロナの感染封じ込め政策が成功していると思われる。衛生福利部は感染源の追跡を続行するだけでなく、国民の衛生安全を確保するためのワクチン接種も推進している。

1-3 台湾における感染封じ込め政策と全国的措置

台湾では、世界の情勢に比べて比較的感染者数が少ないものの、2021年5月から7月まで警戒レベルを第3級に引き上げている。2021年5月18日の時点で、国内の小中学校と中学校は対外開放を停止し、学期末までオンライン授業に切り替えた。国民の大半はロックダウンを経験しているが、学生たちは家で過ごす時間が増え、友達と会うために外出する時間が減ったことから、不安感が増大した。親たちもまた、できる限りすぐに通常の生活に戻れるように、迅速な対応をする必要があった。幸いなことに、第3級の警戒レベルが続いたのは2カ月だけで、2021年7月27日に第2級に引き下げられた。この頃までには国民の大多数がワクチン接種を受けていた。新学期が始まる日（2021年9月1日）までに、台湾の教師たちの80%以上がワクチン接種を済ませており、成人全体の接種率は42.63%に到達していた。

現在、台湾では感染拡大のペースが減速し、事態は収束に向かっていることから、CECCは警戒レベル第2級を維持すると発表した。台湾の防疫規則と全国措置は以下の通り：

- A. 外出時は常にマスクを着用する
- B. 商業施設および公共施設は、実名登記制、検温、消毒強化、従業員の健康管理、感染者が発生した場合の迅速な対応など、防疫処置の実施を遵守する。

2. 調査の実施場所

台湾チームは、共同研究プロジェクトに参加してすぐに、中産階級が住む郊外というリサーチデザインに最も適した都市を決める必要があった。検討の末、新北市の樹林区、新荘区、泰山區を調査の実施場所として選ぶことにした。

新北市について

新北市は台湾北部に位置し、中央政府が直轄する都市である。台湾の首都である台北市をぐるりと取り囲む形で位置し、その人口は2021年現在で4,008,113人と推定される。新北市は複数のレジオポリス(首都圏から外れた都市)、郊外のビジネス街、郊外住宅地が一つの大都市圏にまとまったものである(Wikipedia, 2022)。新北市の面積は広く、経済の発展状況は行政区画によって異なる。本研究の対象地である樹林区、新荘区、泰山区は新北市の郊外に位置し、大都市圏の中心から外れた産業地帯となっている。住民の大半は労働者である。この3地区の人口規模は大きく、人口密度が高いため、住民はパンデミックの影響を受けやすい。図1は本調査の実施場所を示す地図である。調査対象児の大半は赤い円で囲まれた地域に住んでいる。

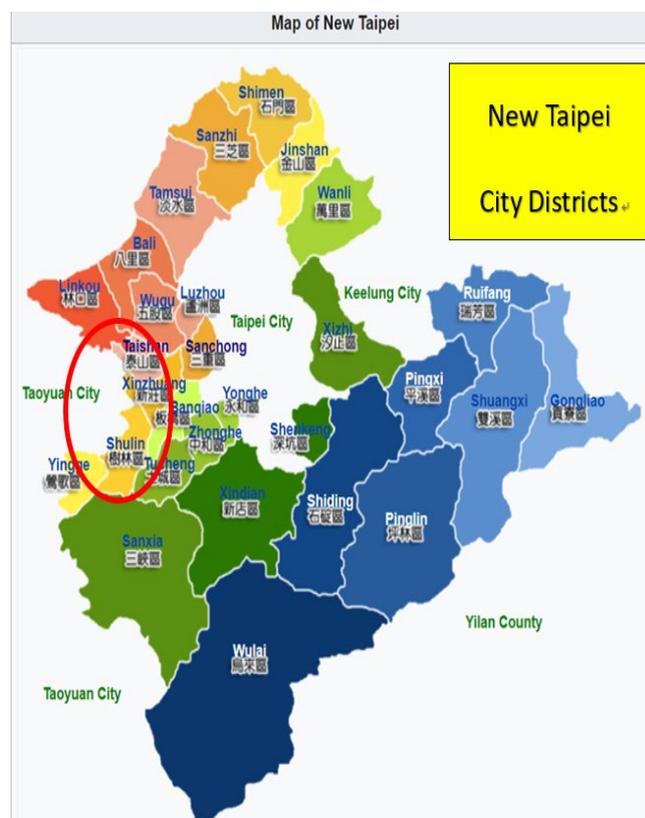


図1:調査の実施場所

3. 調査対象

本調査では、子どものハピネスとレジリエンスを調べるために、5歳児と7歳児(2年生)の2つの年齢グループを対象とした。幼い子どもの読解能力には限界があるため、子どもの母親に回答してもらうように依頼した。各年齢グループ

の回答者は280人とした。無効な回答を除外した後、有効なサンプルサイズは5歳児グループで260人、7歳児で251人となった。

4. 調査方法

本調査は2021年9月前半（2週間）に実施した。CRNA事務局が作成したアンケートを中国語に翻訳し、これを使用して台湾の子どものハピネスとレジリエンスに関する母親の考えを調査した。母親たちには、養育態度、子育て意識、パンデミックに対する不安、家族のサポート、家庭の基礎情報（経済状態や学歴など）についても回答してもらった。データの収集は2021年9月10日に完了し、SPSSを使用して相関分析および分散分析（ANOVA検定）を行った。

5. 結果

データを分析した結果、コロナ禍における調査対象児の状況について多くのことが得られた。共同研究プロジェクトの主な目的は、新型コロナのパンデミックが子どものレジリエンスとハピネス(QOL)に及ぼす影響を把握することであった。しかしながら、台湾では感染封じ込め政策が奏功したおかげで、国民はパンデミックの脅威をあまり意識していなかった。国内の学校は1ヵ月間閉鎖され、学生はオンライン授業を余儀なくされたものの、子どもの身体的、精神的なストレスは限定的なものだった。以下のセクションでは、データ分析の結果について述べる。

5-1 デモグラフィックデータ

5-1-1 子どもの基礎情報

サンプルの男女比率は、両方の年齢グループとも、男女ほぼ50%ずつであった。大半の世帯では子どもの数が2人未満（5歳児で66.9%、7歳児で75.7%）となっており、外出が禁じられた場合、一緒に遊ぶ相手が比較的少ないことが伺われた。また、調査対象児のうち、コロナ禍においても十分な睡眠（8～10時間）をとっているのは5歳児で78.8%、7歳児で90.4%と、比較的多いことも確認された。睡眠を十分にとっていることは、子どもの心身面の健全な状態を示している。

5-1-2 コロナに関わる状況

本調査が行われている間、新北市でロックダウンが実施されることはなかった。しかし、図2で示すように、母親たちの約20%が、自分の住んでいる所がロックダウンの状態にあると感じていた。このことから、パンデミックが大人の日常

生活に影響を及ぼし、不安感を高めていたことが伺われる。さらに、子どもが学校に行けなくなったことも、親がますます不安になる原因であったと思われる。

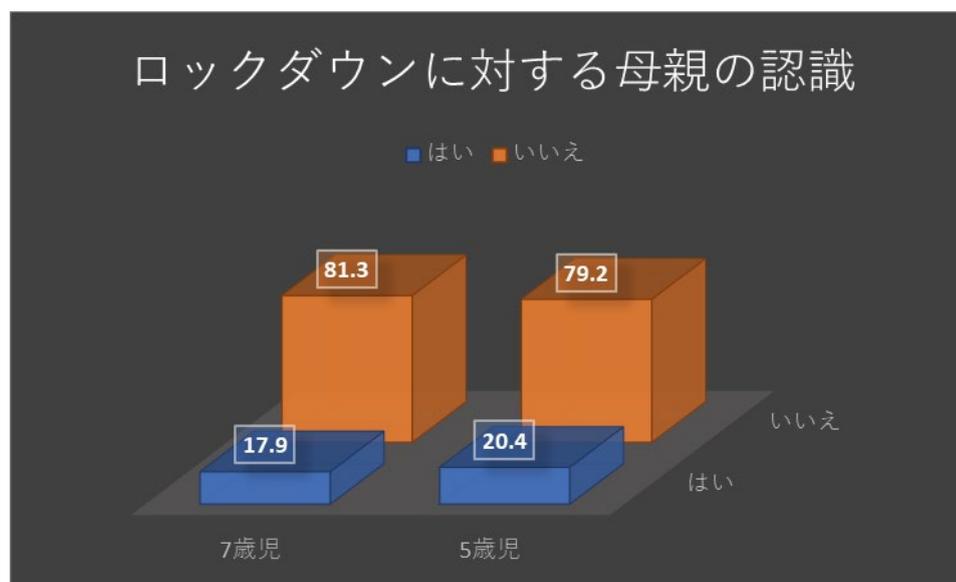


図2:ロックダウンに対する母親の認識

また、コロナ禍における国・地域の対応に対する満足度に関しては、5歳児の母親たちの50.8%、7歳児の母親たちの41.9%が満足していると答えている。感染拡大への不安については、5歳児の母親たちの79.2%、7歳児の母親たちの83.6%が将来を楽観視していなかった。図3と図4は新型コロナに関する母親たちの回答をまとめたものである。

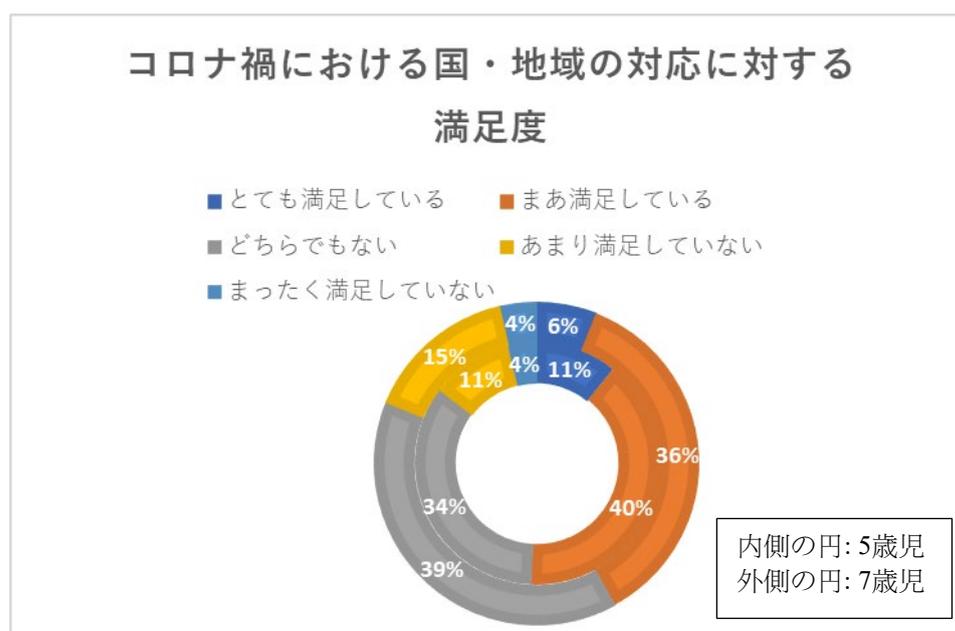


図3:コロナ禍における国・地域の対応に対する満足度

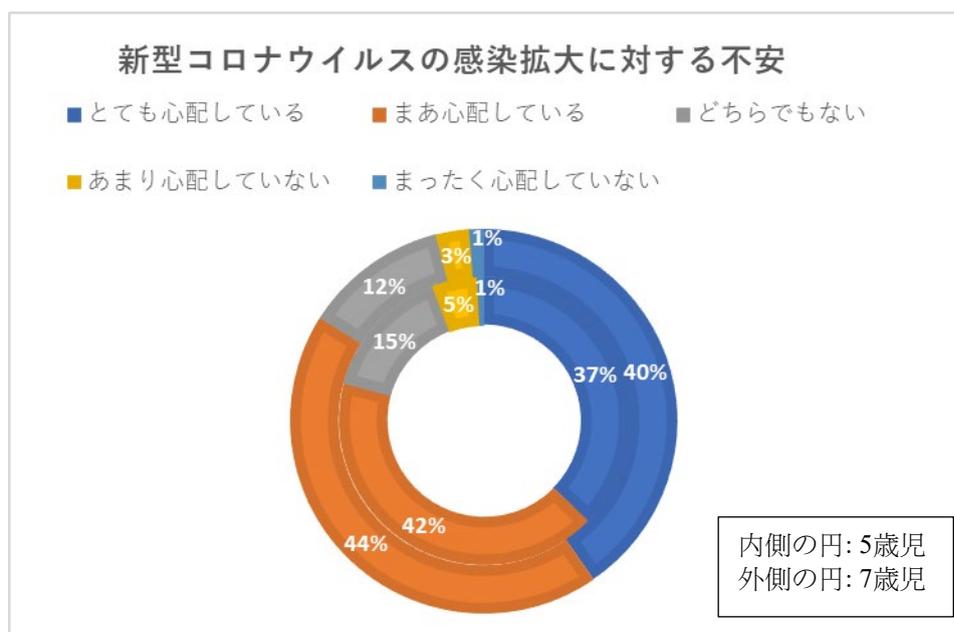


図4: 新型コロナウイルスの感染拡大に対する不安

5-1-3 親の学歴、職業、収入の変化

調査対象世帯の基礎情報に関しては、大都市の郊外で調査を行ったことから、サンプル世帯の大多数が労働者であった。

(1) 学歴:

5歳児の母親たちの63.5%、父親たちの53.5%が高等教育を受けており、7歳児に関しては母親たちの66.5%、父親たちの53.8%が高等教育を受けていた。

(2) 職業:

大半の親は仕事を維持していたが、収入は減少していた。また、5歳児の母親たちの31.5%、7歳児の母親たちの20.3%は無職であった。これは、子どもが幼いうちは育児の必要があることが原因と思われる。父親／パートナーに関しては、5歳児の父親たちの5.4%、7歳児の父親たちの1.6%が無職であることがわかった。従って、大半の世帯はコロナ禍によって影響を受けていないことが確認された。

(3) 世帯収入:

親の仕事は安定していたが、世帯収入はコロナ禍以前と比べて減少しており、5歳児の世帯の45.8%、7歳児の世帯の40.6%が、収入が減ったと答えている。5歳児の世帯のうち、43.1%が中流層、29.2%が下流層であ

り、7歳児の世帯に関しては、51.0%が中産階級、23.5%が下流層であった。

(4) 家族形態：

大半の世帯は核家族であり、17.3%の回答者(対象児の母親)は自分の母親と暮らし、24.6%が配偶者の母親と暮らしていた。また、世帯の約75%は子どもの世話をするヘルパーを雇っていないかった。このことは、園／学校が閉鎖された場合、家で子どもの面倒を誰がみるかという問題が生じる原因になると思われる。

5-2 主要パラメータ(要因)

本調査では、子どものハピネスとレジリエンスに影響を及ぼす可能性のある様々な要因を調べた。すなわち、母親の養育態度、子育て意識、配偶者のサポート、子どものデジタルメディア活用、子どものデジタルメディア活用時の親のかかわりなどである。

5-2-1 母親の養育態度

先行研究では、母親の養育態度が子どものハピネスに影響を及ぼすことが指摘されている(Jansen, Daniels & Nicholson, 2012、Peters, Sinn, Campbell & Lynch, 2012、Schiffirin, Godfrey, & Liss, et al, 2015)。本調査の結果、大半の母親たちは自分の養育態度は寄り添い型であり、厳格(懲罰的)ではないと答えている(図5を参照)。

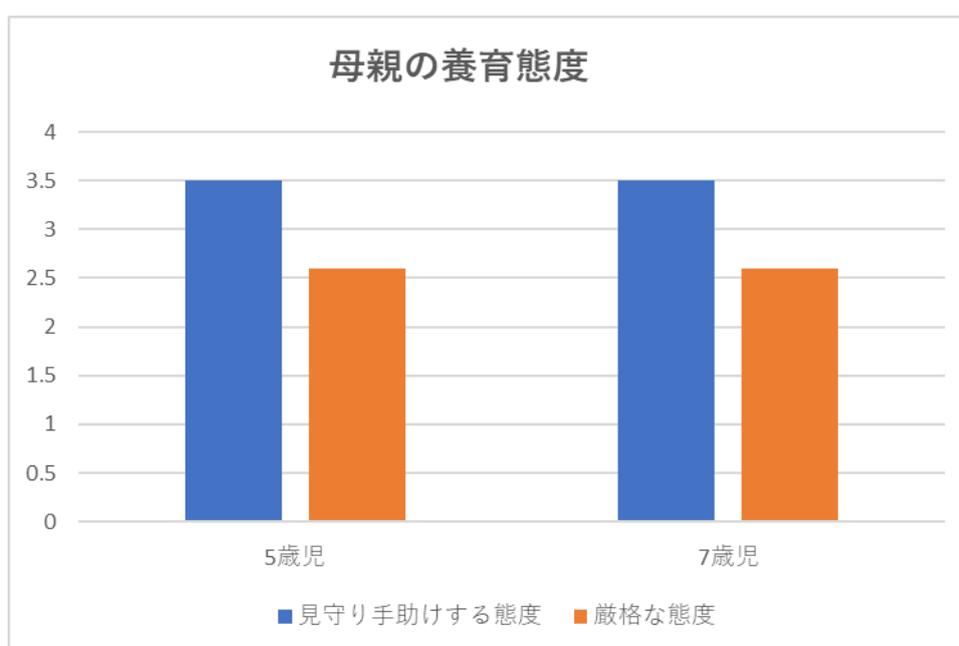


図5:母親の養育態度

しかし、調査の結果、台湾の母親たちが寄り添い型の養育態度であることが確認されたものの、子どもが受け入れ難い言動を見せた場合は「きつくせめる」と答えた母親の比率は比較的高く（5歳児の母親＝66.5%、7歳児の母親＝78.1%）、「体罰を与える」と答えた母親の数も少なくない（5歳児の母親＝35.7%、7歳児の母親＝32.7%）（図6と図7を参照）。

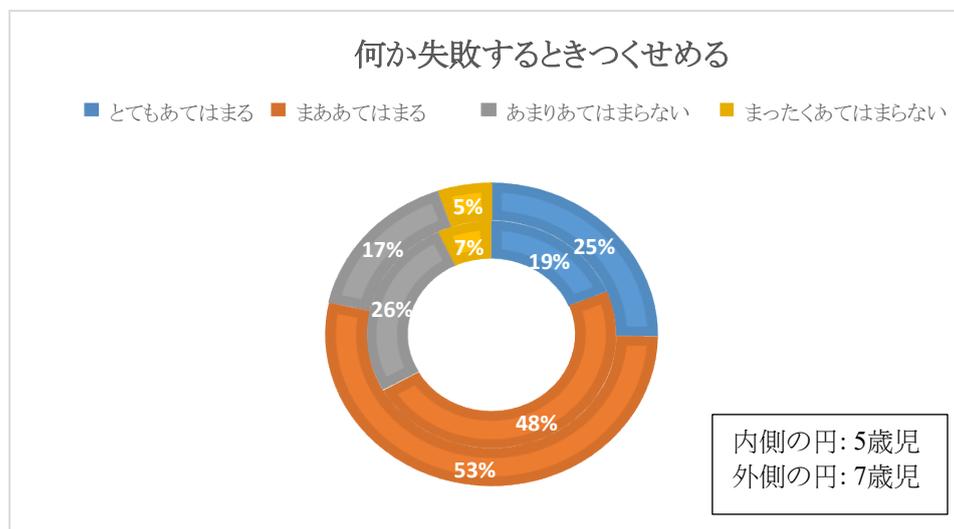


図6:「何か失敗するときつくせめる」に対する母親の回答

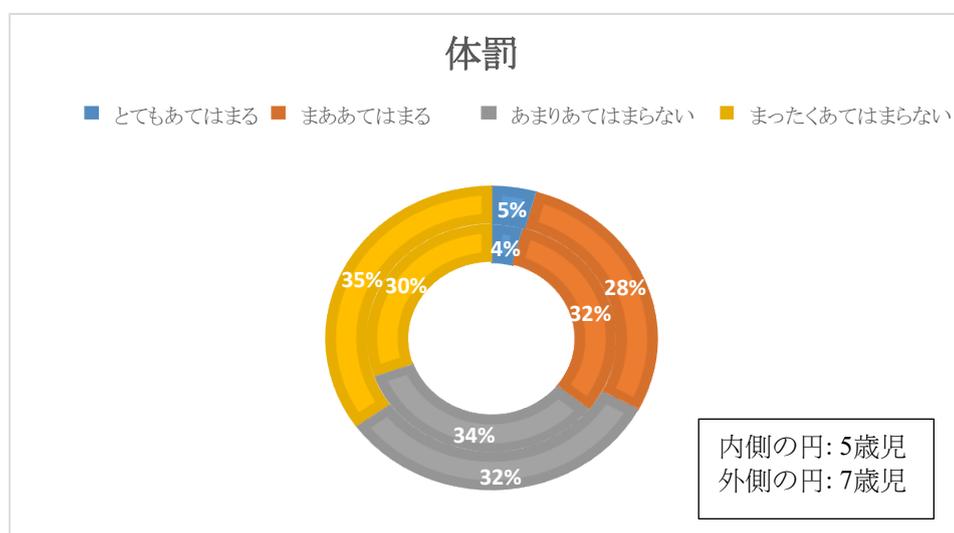


図7:「体罰によるしつけ」に対する母親の回答

5-2-2 母親の子育て意識

調査の結果、大半の母親たちは子育てを楽しんでいることが確認された。ただし、「子どもを育てるのは楽しく幸せなことだ」と答えた母親が多い（5歳児の

母親＝85.8%、7歳児の母親＝88%) 半面、「いい親であろうとして、自分に無理をしていると感じる」と答えた母親も少なくはない(5歳児の母親＝64.6%、7歳児の母親＝58.1%)。母親たちは子育てを楽しみ、いい親であろうと努力しているがゆえに、無理をしていると感じる瞬間もあり、自分の子どもが他の子どもよりも劣っていないか気にせずにはいられないのであろう(図8, 図9, 図10を参照)。



図8:「子育てを楽しんでいる」に対する母親の回答

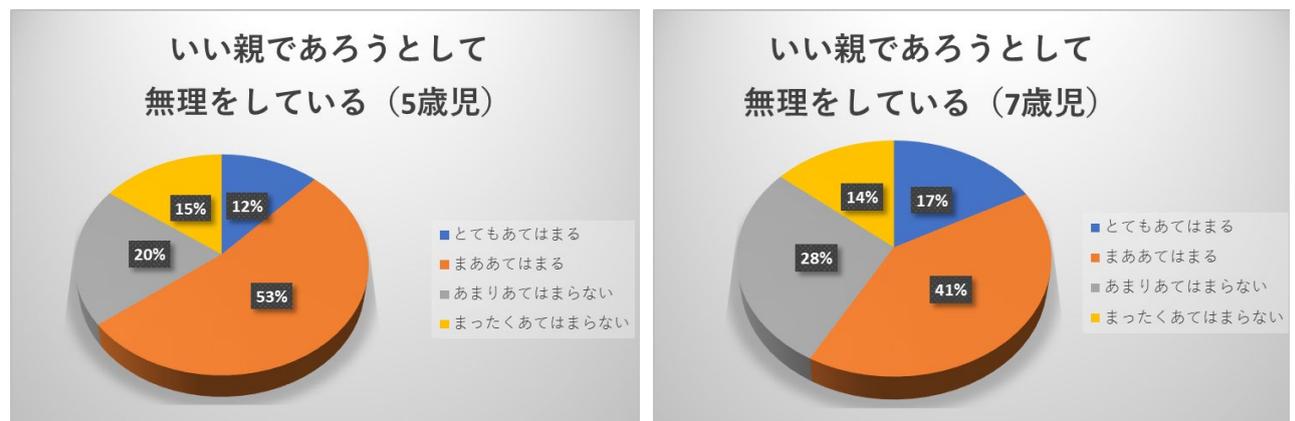


図9:「いい親であろうとして無理をしている」に対する母親の回答

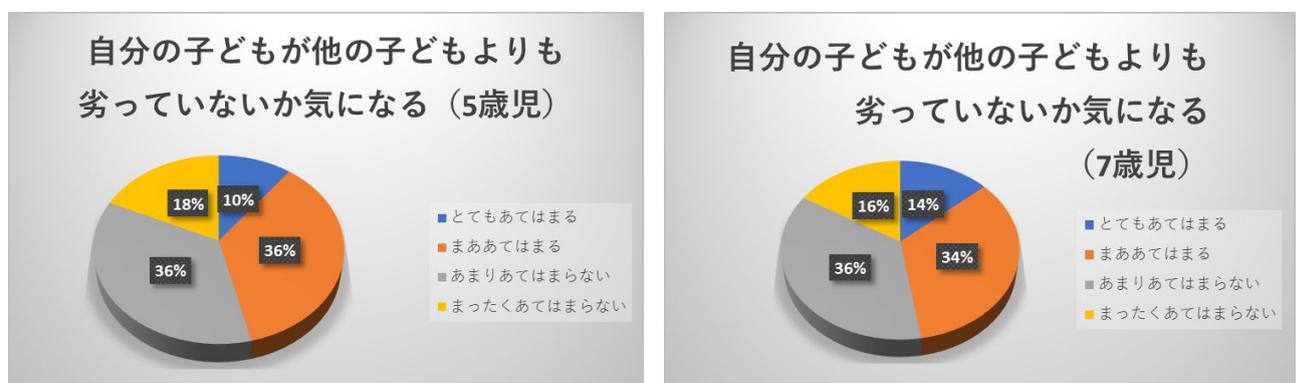


図10:「自分の子どもが他の子どもよりも劣っていないか気になる」に対する母親の回答

5-2-3 家族のサポート

母親たちの大半はコロナ禍においても仕事を続けていた。職業の種類は様々であるが、母親たちは仕事と家事の両方に取り組んでおり、かなりの重荷になっていた。図11と図12は、母親の育児と家事の分担割合を示しているが、大半の母親が50%以上の育児負担（5歳児の母親＝91.6%、7歳児の母親＝92%）と50%以上の家事負担（5歳児の母親＝88%、7歳児の母親＝88%）を受け持っていた。従って、母親のハピネスは父親のサポートによって大きく左右されると言えよう。

図13は母親に対する配偶者のサポートの状況を表したものである。父親のサポート面で最も多いのは子どもと一緒に遊ぶことで、最も少ないのは子どもに勉強を教えることであった。このことから、母親は子どもの学習に力を入れているので、配偶者が勉強を教える役割を十分に果たしていないと感じていることが伺われる。また、母親の学歴水準が父親よりやや高いことも、母親が子どもの勉強をみる役割を担う理由の一つであろう。



図11: 母親の育児負担



図12: 母親の家事負担

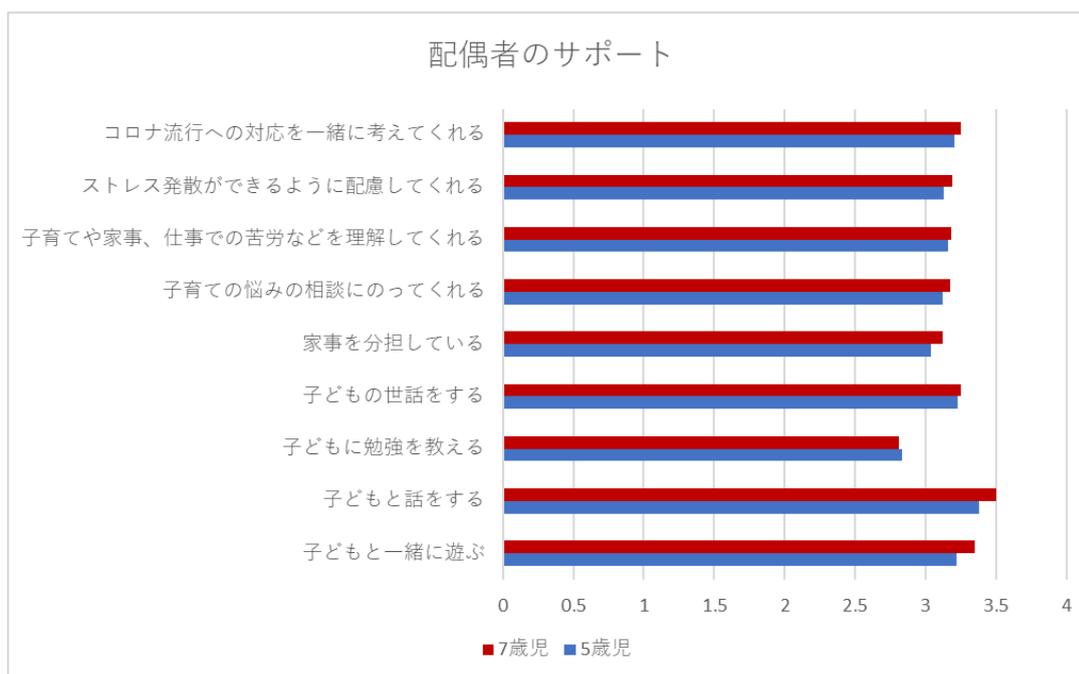


図13:配偶者のサポート

5-2-4 子どものICT活用

この現代社会において、子どもがICTを頻繁に使うようになることは避けられない。教育機関は子育てやしつけでICTを活用する割合を増やすように奨励しており、過去数十年間、教育現場の高度情報化への移行に多くの努力が費やされてきた。そして、コロナ禍によって生徒間の身体的距離を確保し、対面授業を回避しなくてはならない現在、これまでのICT普及への努力の成果を試す機会が訪れた。以下のデータは、現在の台湾の子どもたちによるICT活用の実態を可視化したものである。

図14は、子どものデジタルメディア活用に関する調査結果を表している。5歳児に関しては、最も多い用途は「動画を視聴する」で、5段階評価(1:よくする～5:まったくしない)に基づく平均スコアは2.65であった。また、2番目に多いのは「音楽を聴く」で平均スコアは2.63、3番目に多いのは「身体を動かせるようなプログラムを楽しむ」で平均スコアは2.3、その一方で、めったに使わない用途は「情報を検索する」(0.88)、「ニュースを見る」(0.69)であった。7歳児に関しては、最も多い用途は「園、学校や習い事、塾等から配信されるプログラムを視聴する」で平均スコアは2.43、2番目に多いのは「オンライン授業を受ける」で平均スコアは2.37、3番目に多いのは「園や学校の宿題をする」で平均スコアは2.14であった。一方、めったに使わない用途は「電話で通話する」と「情報を検索する」(1.09)、「ニュースを見る」(0.67)であった。こうした結果から、台湾の子ども

たちは、娯楽やインターネット検索よりも、勉強の目的でデジタルメディアを使用していることが伺われた。また、5段階評価（リッカート尺度）で低い平均スコアの項目は、親が子どものデジタルメディア活用を制限、管理、または監督していることを示唆している。

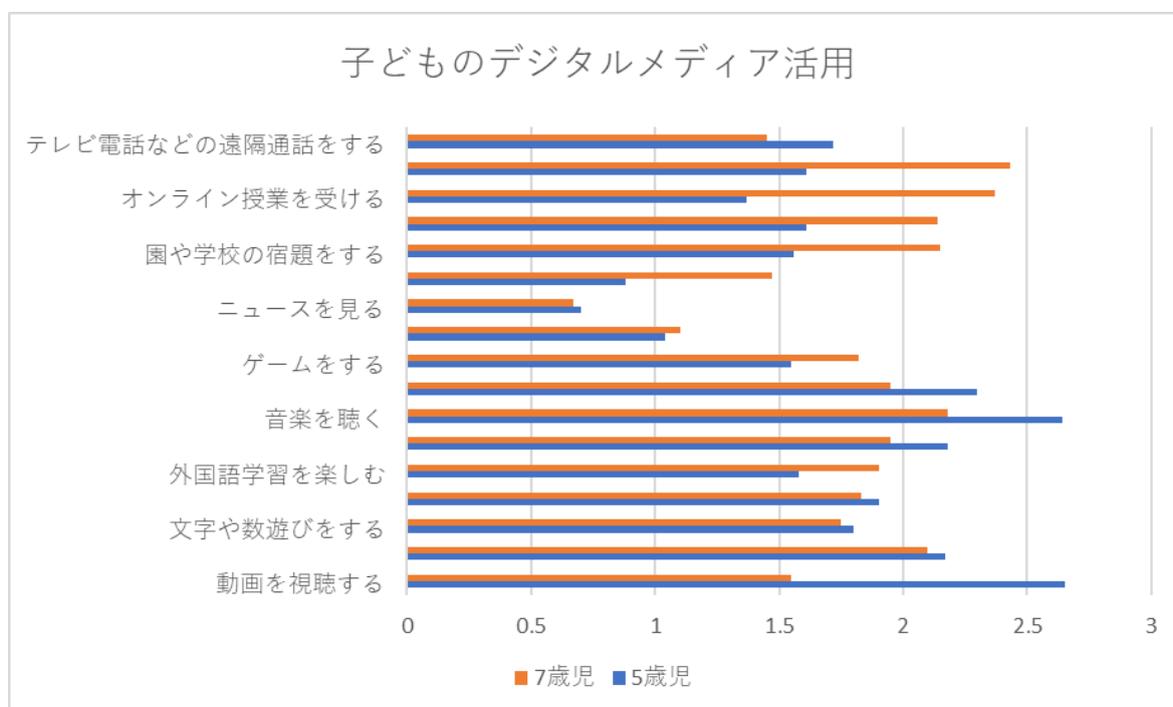


図14: 子どものデジタルメディア活用

5-2-5 子どものICT活用に対する親のかかわりと意識

子どものデジタルメディア活用に対する親のかかわりについては、5歳児の親の場合、「常に子どもが使用・視聴している様子を気にかける」(3.58)、「子どもが難しいことに取り組めるよう支援する」(3.55)にあてはまると答えた者が多く、その一方で、「子どもが一人で自由に使用・視聴する」(2.30)、「使用・視聴時間を決めるよう声をかける」(2.68)にあてはまると答えた者は少なかった。7歳児の親に関しては、「常に子どもが使用・視聴している様子を気にかける」(3.51)、「子どもが難しいことに取り組めるよう支援する」(3.41)にあてはまると答えたものが多く、「子どもが一人で自由に使用・視聴する」(2.67)、「使用・視聴時間を決めるよう声をかける」(2.84)にあてはまると答えたものは少ない。こうした結果から、親は子どものデジタルメディア活用に対して積極的に監督していることが伺われる。

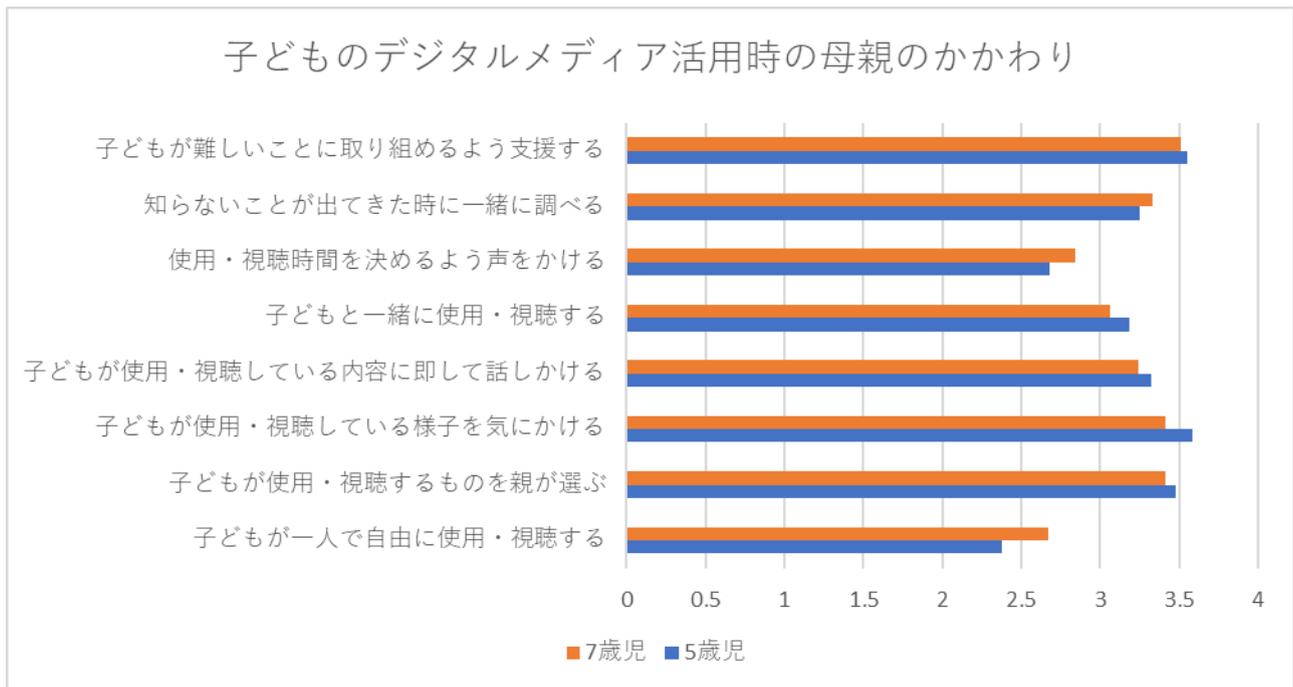


図15: 子どものデジタルメディア活用時の母親のかかわり

本調査ではさらに、コロナ禍前後での子どものICT活用に対する母親の抵抗感の変化についても調査した。5歳児の場合、母親たちの大半が「以前から抵抗感はなく、今もない」（子どもが娯楽や遊びのために使用する場合＝41.9％、勉強のために使用する場合＝51.5％）と答えている。7歳児に関しては、母親たちの大半が、子どもが勉強のためにICTを使用する場合は「以前から抵抗感はなく、今もない」（47.4％）、子どもが娯楽や遊びのために使用する場合は「以前から抵抗感があり、今もある」（32.3％）と答えている。従って、子どものICT活用に対する母親の態度はコロナ禍前後で変化していないことが確認された。

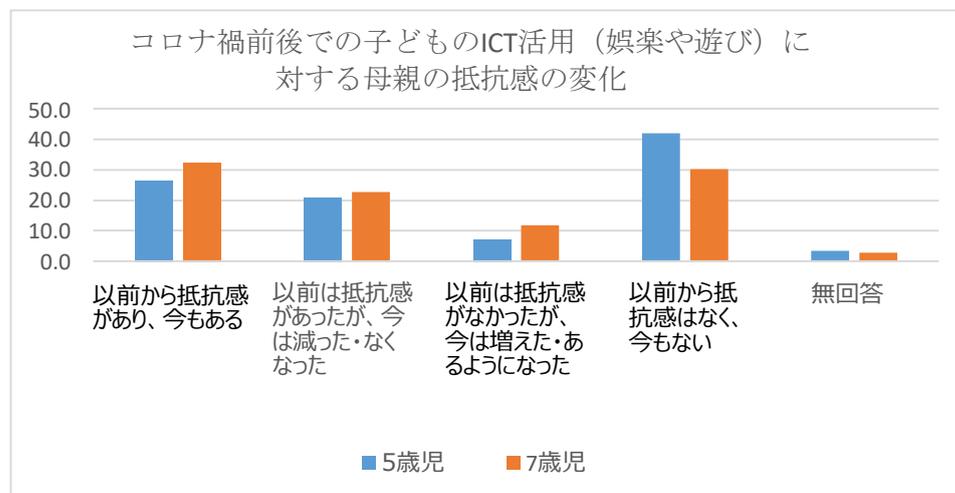


図16: コロナ禍前後での子どものICT活用（娯楽や遊び）に対する母親の抵抗感の変化

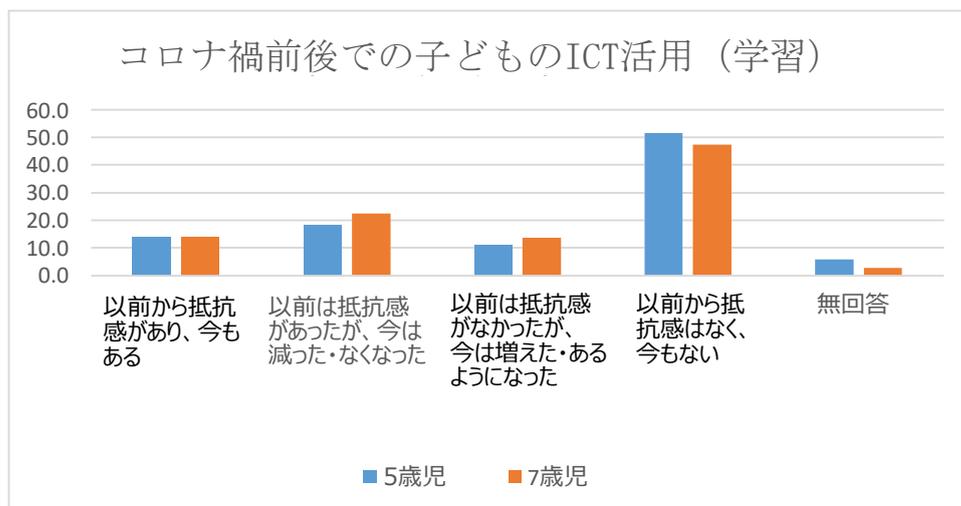


図17:コロナ禍前後での子どものICT活用(学習)に対する母親の抵抗感の変化

5-2-6 子どもの日常生活と遊び

さらに、調査の結果、子どもの日常的な時間の使い方がコロナ禍前後で大きく変化したことも確認された。図18と図19は、5歳児および7歳児が屋外で遊ぶ時間が大幅に減り、デジタル機器の使用時間が増えたことを示している。コロナ禍によってデジタル機器の使用が大きく促進されたことが伺われる。

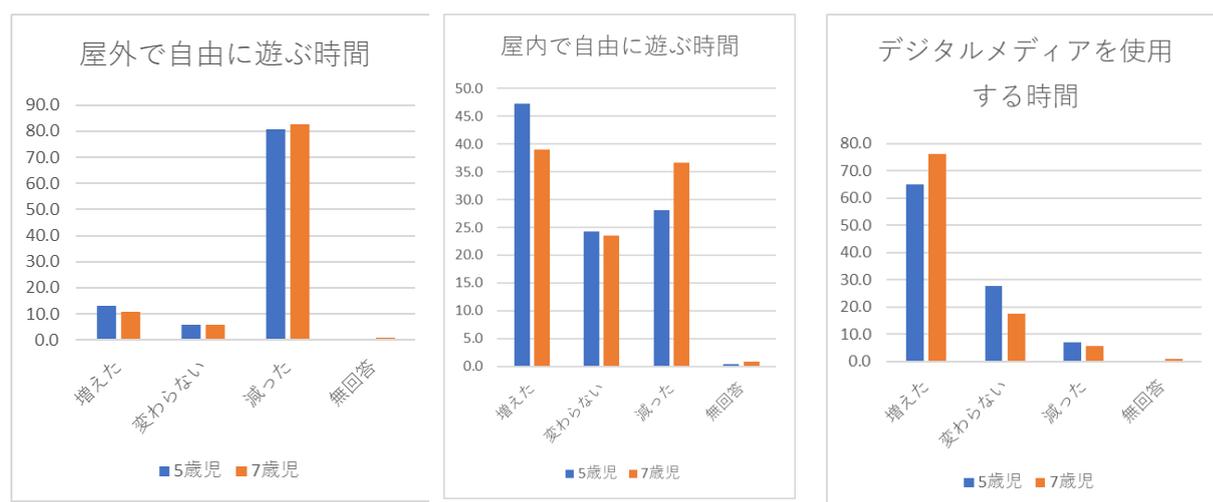


図18:コロナ禍前後での時間の変化(活動別)

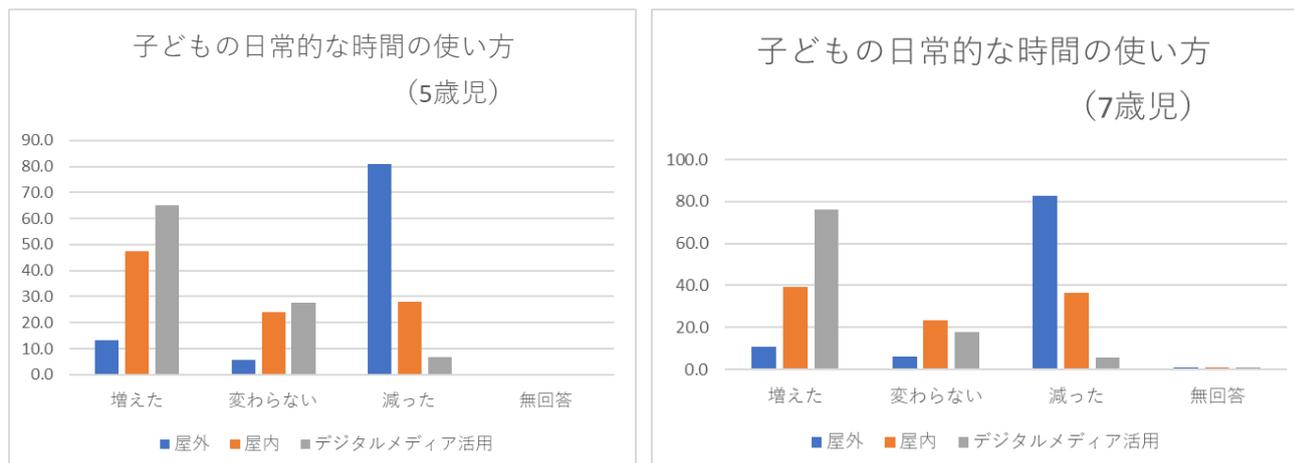


図19:子どもの日常的な時間の使い方(年齢別)

5-2-7 園／学校のサポート

コロナ禍により台湾で最も影響を受けたのは園や学校である。しかしながら、調査の結果、母親たちの95%は自分の子どもが園／学校のサポートを受けていると答え、88%は自分自身が園／学校からサポートとアドバイスを受けていると答えていることがわかった(図20を参照)。こうした結果から、園／学校はコロナ禍においても生徒と母親の両方を適切にサポートしていたことが確認された。

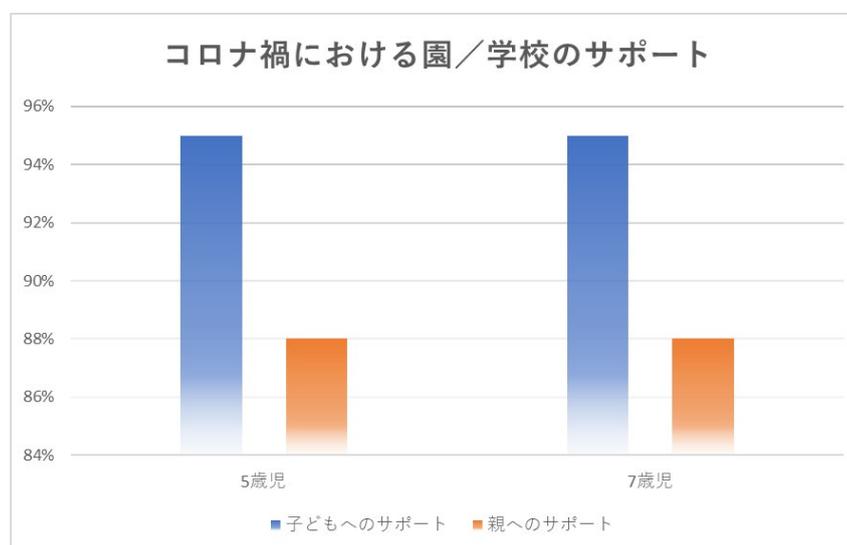


図20:コロナ禍における園／学校のサポート

5-3 子どものレジリエンスとハピネス(QOL)

本研究の主な目的は子どものレジリエンスとハピネスを調査することである。その結果、表1と表2が示すように、子どものレジリエンスとハピネス(QOL)は

全ての項目で高いスコアを獲得していることがわかった。

表1:子どものレジリエンス

	5歳児	7歳児
パーソナルレジリエンス	4.1	4.1
保護者・養育者レジリエンス	4.5	4.5
平均	4.3	4.2

表1は2つの項目（パーソナルレジリエンスと保護者・養育者レジリエンス）のスコアを表したものであるが、両方の年齢グループとも高いスコアを示している。

表2:子どものハピネス(QOL)

	5歳児	7歳児
身体的QOL	4.5	4.5
心理的QOL	4.275	4.262
自尊感情	4.04	3.966
家族関係のQOL	4.15	4.072
友達関係のQOL	3.664	3.673
日常(園/学校)	4.066	3.783
平均	4.1	4.0

表2では、子どものQOL項目である「身体的QOL」、「心理的QOL」、「家族関係のQOL」が高いスコア、「友達関係のQOL」と「日常(園/学校)」が低いスコアとなっている。また、注目すべきは7歳児の「自尊感情」が5歳児よりも低いスコアを示していることで、おそらくオンライン授業が原因と思われる。

5-3-1 子どものレジリエンス

図21が示すように、子どものレジリエンスは両方の年齢グループとも、高いスコアとなっている。特に、保護者・養育者レジリエンスはパーソナルレジリエンスを上回っている。保護者・養育者から受けるサポートを詳しく見てみると、5歳児のレジリエンスには、家族のサポート(4.6)、パーソナル(4.1)、友達のサポート(3.8)から成ることがわかる。7歳児の子どものレジリエンスに関しては、家族のサポート(4.5)、パーソナル(4.1)、友達のサポート(3.8)から成る(図22を参照)。

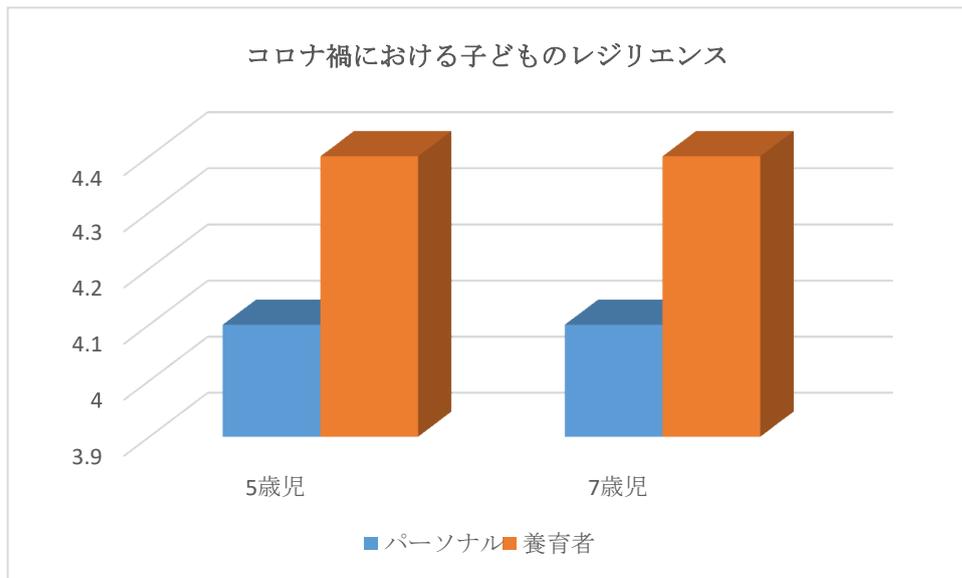


図21: 子どものレジリエンス(パーソナル/養育者)

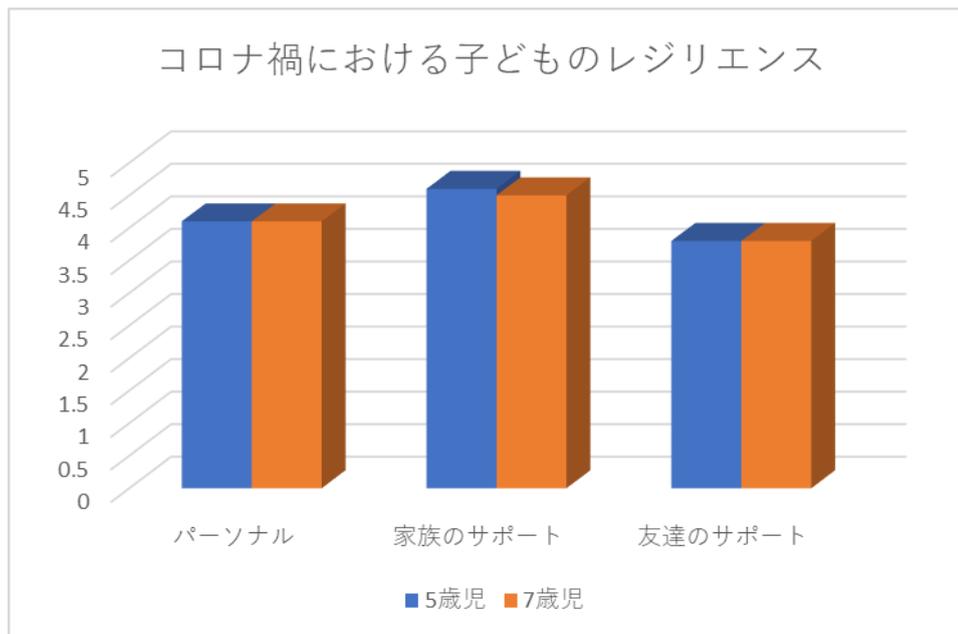


図22: 子どものレジリエンス(パーソナル/家族/友達)

5-3-2 子どものハピネス(QOL)

調査の結果、コロナ禍における台湾の子どもたちのハピネス(QOL)もまた高いスコアであることがわかった。子どもたちは心身ともに健全な状態にあった。ただし、ウェルビーイング(身体的および心理的QOL)が高いスコアであるのに対し、「友達関係のQOL」(5歳児=3.66、7歳児=3.67)と「日常(園/学校)」(5歳児=4.06、7歳児=3.78)は比較的低い値となっていた。こうした結果

から、台湾ではコロナ禍によって深刻な健康被害や医療体制の崩壊は起こらなかったものの、学校が1ヵ月ほど閉鎖されたことによって、子どもたちは家に閉じこもることを余儀なくされ、友達や学校生活に関するQOLが影響を受けたことが伺われる。

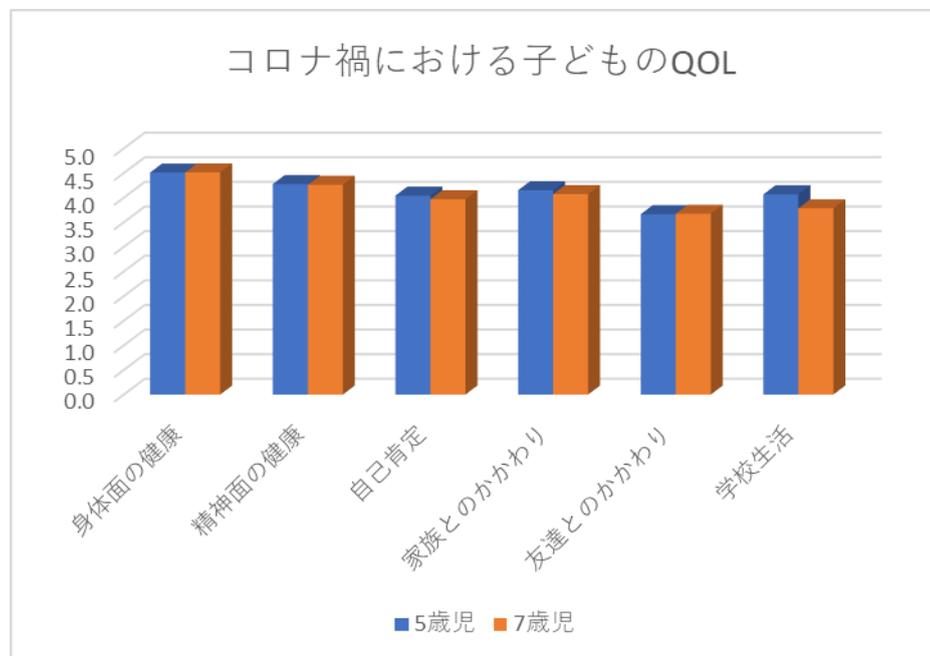


図23: 子どものQOL

5-3-3 ICTの役割と影響

台湾はコロナ禍においても高い死亡率は記録せず、子どもたちに大きな影響を及ぼしたのは2021年5月から6月までに実施された1ヵ月の学校閉鎖であった。閉鎖の決定は迅速に行われ、多くの家族が影響を受けた。予期しないロックダウンのために、園／学校は初めてオンライン授業を行い、教師や園／学校の運営者は多くの不安を抱えることになった。そのため、研究者にとって、コロナ禍におけるICT活用が子どものレジリエンスとハピネスに影響を及ぼすかどうかを知ることは極めて重要になった。そこで、本研究の台湾チームは、コロナ禍がもたらした学習形態の大きな変化におけるICTの役割と影響を調べるため、ICT関連の質問項目の相関関係を分析した。すなわち、「子どものデジタルメディア活用の実態」(Q9)、「子どものデジタルメディア活用時の親のかかわり」(Q10)、「子どもがデジタルメディアに費やす時間」(Q12)、「コロナ禍前後でのデジタルメディアに費やす時間の変化」(Q14)である。図24は、これらの変数と、子どものレジリエンス(Q6)やハピネス(QOL) (Q7)との相関関係を示したものである。

台湾チームはさらに、世帯収入、親の学歴や職業などの基礎情報について分散分析を行い、これらの影響を調べてみたが、前述の変数との有意な相関は見られなかった。

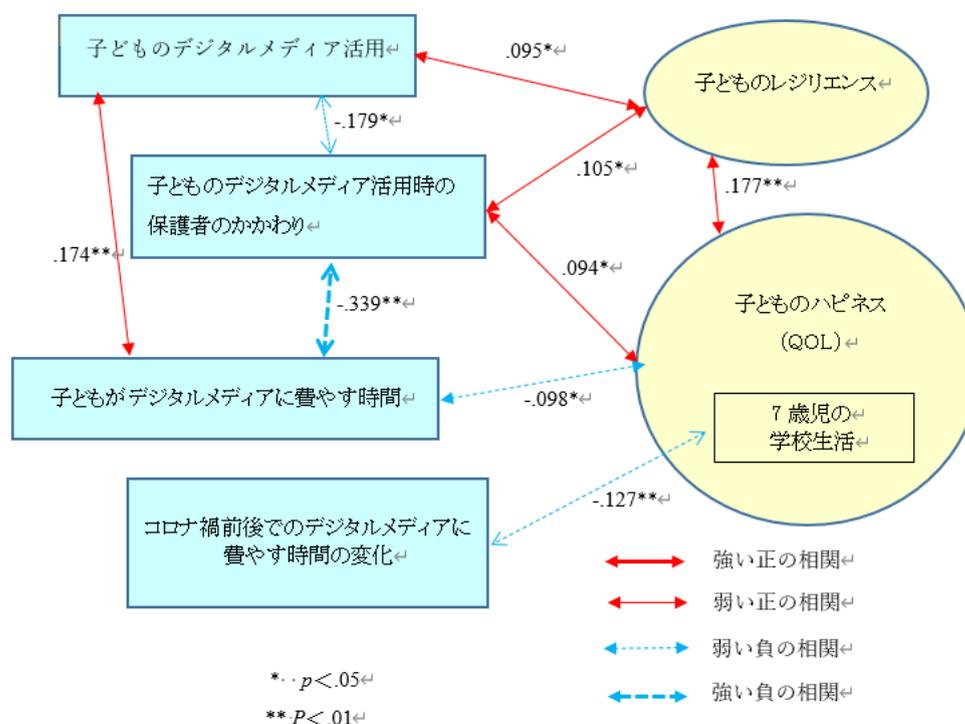


図24:変数の相関関係

いくつかの変数には弱い正の相関が見られるものの、相関係数は概して低い水準であった。この結果から、コロナ禍におけるICTの使用と子どものレジリエンス/ハピネスとの相関関係は弱いことが伺われた。唯一、比較的強い相関が見られるのは、「コロナ禍前後でのデジタルメディアに費やす時間の変化」とQOL項目の「7歳児の学校生活」との間で、これは負の相関であった。これは、生徒が学校からオンライン授業を受けるように言われ、デジタルメディアに費やす時間が多くなればなるほど、生徒は学校の成績が不安になったことを示している。結果としては、教師と生徒の双方がデジタルメディアを使用する経験が浅いために、コロナ禍がもたらした急激な変化によって彼らのICTスキルが試されることになった。

6. 考察

あらゆる側面からデータの分析を行った結果、世界はいまだにコロナ禍の深刻な脅威に晒されているものの、台湾は厳しい国境閉鎖政策と国民の高い

警戒感のおかげで比較的 안전한状態にあることがわかった。親の養育態度や子どもたちのレジリエンス/QOLは常に高い水準を維持しており、子どもたちのレジリエンスとハピネスがコロナ禍によって悪化することはなかった。コロナ禍によってやや影響を受けたのは親の仕事と育児の時間で、そのことについて不安を示す親もいたが、現実的に子どものハピネスに影響を及ぼすことはなかった。

一方、園や学校が1ヵ月間閉鎖されたことによって、いくつかの教育上の問題が明らかになった。第一に、台湾の親たちがよその国の親たちに比べて子どものデジタルメディア活用を比較的厳しく監督していることが挙げられる。一般に、台湾の親たちは子どもがデジタル機器の使い方や適度な使用時間を判断できないと考えている。すなわち、デジタルメディアは「娯楽」という意識が強い傾向にある。もしデジタルメディアが教育に用いられるようになると、子どもに極力デジタル機器を使わせないようにする親の姿勢と対立することになる。

さらに、学校閉鎖の間、子どもたちは屋外で長時間遊ぶことができなくなった。調査の結果、こうした日常生活の変化によって子どもたちがデジタル機器に費やす時間が大幅に増えたことが明らかになった。親の態度とデジタルメディアに費やす時間を分析してみると、台湾の親たちは「勉強のため」にデジタル機器を使うことに価値を見だし、「遊びのため」に使うことには重きを置いてないことがわかった。すなわち、台湾の親たちは、子どもたちに、屋外の遊びが禁じられている間は、遊びよりも学習に時間を費やしてほしいと思っていることが明らかになった。子どもの遊びに対する意識は比較的保守的であり、「遊ぶこと」はあまり奨励されていない。

最も重要なことは、調査の結果、7歳児が家庭でオンライン授業を受ける時間が長いほど、幸福感は低下し、将来に対する不安が拡大することがわかったことである。教師がオンライン授業にいくら力を注いでも、生徒のハピネス(QOL)は低いままである。この現象は、社会学者Z. Baumanの「個人が過度に自由を持つことは、現行システムの規範的な力を失わせ、人々が方向性や目的を見失うことになる」(2001)という論説に同調するものであろう。生徒たちが家で長い時間を過ごすことになると、学校の授業がもつ規範的な力は失われ、生徒たちは学習の目的や目標を見失うことになる。Baumanによると、こうした問題を解決するには「思いやりと責任感」を確立することが推奨される。実際に学校に通い、対面授業を受けることは、人との交流に適度な持続性が得られるため、「思いやりと責任感」を確立することが比較的容易である。仮想世界の授業では生徒の学習の方向性が見失われがちだが、こうした「思いやりと責任感」を確立

することによって解決することができるのかもしれない。

7. 本研究の結果と限界、提案

本研究では、コロナ禍における台湾の子どもたちのハピネス(QOL)とレジリエンスを調査し、概ね良好な状態にあることが確認された。一方、学習を目的としたICT活用は、特に子どもたちのレジリエンスとQOLに対し、有意な差異は見られなかった。ただし、子どもたちがデジタルメディアの使用に費やす時間が長いほど、学習に対する不安が増すことには留意すべきであろう。こうした結果から、子どもたちのレジリエンスとハピネスを向上させるには、園や学校が学習活動の設計に細心の注意を払い、ICT活用に頼りすぎず、現実世界における生徒同士の交流を増やすことが必要であると思われる。

コロナ禍の影響は依然として不確実なままである。本研究は短期間のうちに行われたものであるが、コロナ禍が子どもたちのレジリエンスとハピネスに及ぼす最終的な影響については今後も見守り続ける必要がある。従って、本研究を続行し、子どもたちのレジリエンスとハピネスへの理解を深めることが重要であろう。

参考文献

- Bauman, Z. (2001). *The individualized society*. (「個人化社会」) Oxford: Polity Press.
- Jansen, E. A., Daniels, L. & Nicholson, J. (2012) The dynamics of parenting and early feeding – constructs and controversies: a viewpoint. (「育児と食事 - 構成概念と議論: 見解」) *Early Child Development and Care*, **182**:8, 967-981, <https://doi.org/10.1080/03004430.2012.678593>
- Peters, J., Sinn, N., Campbell, K. & Lynch, J. (2012). Parental influences on the diets of 2–5歳児 children: systematic review of interventions. (「2～5歳児の食事に対する親の影響: 介入の系統的レビュー」) *Early Child Development and Care*, **182**:7, 837-857, <https://doi.org/10.1080/03004430.2011.586698>
- Schiffrin, H.H., Godfrey, H., Liss, M. *et al.* (2015). Intensive Parenting: Does it Have the Desired Impact on Child Outcomes? (「徹底的な育児: 子どもの成長に望ましい影響を及ぼすのか?」) *J Child Fam Stud* **24**, 2322–2331. <https://doi.org/10.1007/s10826-014-0035-0>
- Wikipedia (2022). New Taipei City. (「新北市について」) https://en.wikipedia.org/wiki/New_Taipei_City